sousei akita
曹青秋田

秋田名「佛」 ～12教区・満蔵寺（黒木副会長師寮寺）の佛様～

令和元年台風十九号
被災地でのボランティア活動

福島県伊達市
十月二十三日

朝九時、伊達市梁川の伊達市社協ボラセンに秋曹青会員十名集合。三班に分かれて、社協送迎車にて柳川町大町の被災宅へ。

A班は六十代男性宅。母屋と倉庫に使っている二階建と蔵。倉庫は二階まで浸水。二階の水を吸って重くなった畳を運び出し、一階の物を運び出し・泥かきをした。また、水没して散乱した荷物で埋まる蔵の運び出し・泥かきをし、終了させた。玄関先がいわゆる災害ゴミで埋まる。収集が必要だが、いつになるか分からない。地域一帯が同様の被害の様子で、幾らでも手が必要なように見えるが、各自で片付けしているのが目立つ。ボランティアは足りていないと思われる。（事業部長　山田俊哉）

B班は六十代女性宅。家の外にまとめてあるゴミを、近くのゴミ置場へ三輪車に積んで運んだ。スムーズに進み、二時間弱で終了した。

次にボランティアへ入ったのは、板金屋さんを営む八十代近いご夫婦宅。私達が入る前から、五名のボランティアの方が床上に溜まった泥をかきだしていた。築年数のかなり経っているお宅という事もあり、床板は泥と水でかなり傷んでいる様子。家の周りのゴミ撤去も含め、時間内に出来る限りのことを行った。しかし、住める状態には程遠く、これからのご夫婦を思うと、やりきれない気持ちになった。（事務局）

ボランティア「午前のみ」のチームは四名で活動した。八十代夫婦のお宅で、要請内容は《冷蔵庫や鏡台、タンスといった浸水してしまった物の運び出し》。作業は一時間程度で完了した。その後、カビが発生しそうな箇所の拭き掃除や、風通しが良くなるように家具を移動する作業を行なった。奥さんが病気を抱えているため、八十二歳のご主人が頑張って掃除や家具の移動を行なっていたようだ。本人は「大丈夫！」と言ってはいたが、そろそろ疲れが出る頃かと思いボラセンにその旨を伝えた。（副会長　黒木淳祐）

各県曹青会長から報告があったが、被災範囲が広く、状況を把握しきれていない事も多いようだ。被災地のニーズも変化してきているので、また何らかの形で活動出来ればと思う。（会長　赤石基彦）

岩手県釜石市
十一月五日

計六名が参加し、釜石市災害ボランティアセンターを通じて活動した。

午前（平田町尾崎白浜地区）――道路脇の流木などのゴミ運搬・側溝の泥かきを行なった。大きい石が多く苦労した。流木などのゴミと土嚢の運搬先とが離れていたため、軽トラでのピストン輸送となった。午前中で作業は完了した。海沿いの地域で、東日本大震災後にできた防波堤が、山から流れてきた雨水をせき止めてしまったという。

午後（唐丹町本郷地区）――畑の土嚢運搬と、側溝の泥かきをした。畑の脇に、土嚢が山積みになっていた。今回では運搬しきれなかった。同時に泥かきもしていたので、帰る際には来た時と同じくらいの量になっていた。側溝の泥は、場所によっては長靴が埋まってしまう程だった。水分が多く、ペースト状になっており苦労した。側溝から川に流れ出る所が詰まっていて、水が抜けていかない状態だった。水をバケツに入れて、川まで運んで捨てながらの作業だった。こちらは今回では終わらなかった。畑の野菜も泥を被っていた。ここは老夫婦の畑で、とても二人で

は手が追いつかない。これからも支援が必要だった。そういった中でも、皆が帰るまでお辞儀しながら見送ってくれた御夫婦の姿が印象的だった。たまたま大船渡からきた牧師さん・宣教師さんと一緒に活動した。釜石ボラセンでお世話して下さった方も牧師さんだった。宗教を超えて一緒に活動できた事に感銘を受け、励みになった。（事務局）

宮城県丸森町

十一月十四日

九時に丸森町災害ボランティアセンターで受付。十時半より昼を挟んで十五時まで活動した。秋曹青会員六名・四国管区理事一名・一般三名、計十名。

養豚業者の豚舎の機材置場の泥かき。豚は百頭いたうち、無事だった六十頭は預かってもらっているとの事。すぐ隣の阿武隈川の支流の堤防が決壊し、大量の土砂が流入したという。仮堤防は完成していた。豚舎全体が泥に埋もれていた。豚舎の一部は泥かきした跡があったが、ショベルカーで豚舎を掘り出しているような状態だった。飼料やホイールローダーを格納していた倉庫には、五十センチを超える泥が堆積しており、一輪車に積んで外へ出し、ショベルカーでダンプへ積んで排出した。ボラセンからバスで人員を、軽トラで資材を活動場所へ運んだ。スタッフ間の手配のやり取り、意思疎通が大変そうだった。混乱も見えた。地域一帯や家屋はもちろん、車が土砂に埋もれ、流れ傾いた小屋がそのままで、一か月以上経ったとは思えない状況だった。まだまだ人手と時間が掛かる。風が強く、道路の砂埃が煙のように舞っていた。元は田んぼだったという、泥や流木が堆積した荒野を、出所不明の豚が二匹走り回っていたのが衝撃的だった。（山田俊哉）

災害義援金　送金報告

昨年九月と十月に行なった災害義援金募金に対し、多くの浄財を頂戴し、以下の通り送金致しました。ご協力頂きました皆様に、心より感謝申し上げます。

①令和元年台風第十五号
千葉県災害義援金募金

秋彼岸～九月末までの期間、会員寺院に募金箱を設置し、また県内ご寺院へご協力を呼び掛けて募金活動を行ないました。その総額14万3079円を、千葉県共同募金会の口座へ、十月十六日に全額送金致しました。

②同年八月佐賀県豪雨災害・
台風十五号千葉県災害義援金募金

十月二日、秋田県梅花流奉詠大会において募金活動を行いました。その総額11万4144円を、佐賀県共同募金会と千葉県共同募金会の口座へそれぞれ5万7072円ずつ、十月十六日に送金致しました。

（会計　中村智信）

秋田市茨島におけるボランティア活動

令和二年二月十七日未明に浸水被害のあった秋田市茨島二丁目において、同市社会福祉協議会のもと、ボランティア活動に従事した。

二月二十一日午前は会員四名で、社協職員・一般ボラと共に、主に六十代男性宅の家財道具の搬出を行なった。床上二十センチまで浸水したとの事で、多くの書類・雑誌・段ボールが水を吸っていた。またテレビや冷蔵庫も処分しなくてはならず、このお宅の廃棄処分ゴミは四十五リットルゴミ袋で三十袋分に達した。午後から会員がもう二名参加し、同じお宅の畳を剥がした部分を清掃し、バスタオルを敷いた。後は業者による消毒待ちとの事で、ここで終了となった。

二十四日午前は会員四名・社協・一般計約十名が三班に分かれ、各浸水家屋の清掃・家財の搬出や仕分けを行なった。床下浸水だと家具自体は無事だが、畳を剥がして消毒する必要上、沢山の食器や皿が入った収納ボードも移動させなくてはならない。搬出の為には食器を全て取り出し、割れないように梱包する必要があり、かなり時間を取った。この日伺ったお宅では写経や掛軸を多く保管しており、我々が僧侶だと知ってお焚き上げを依頼され、不思議な御縁を感じた。午後は会員二名・一般四名で同じような作業に従事した。

今回の浸水は、雨水などを河川へ流す下水道の水門が故障し、結果排水されずに道路に溢れ、住宅十二棟・空き家一棟が被害を受けたものである。この地域は、目と鼻の先を国道十三号線が通り、商業施設も多い。ごく局所的な被害ゆえ、多くの人や車が気付かずに目の前を行き交う現実に、遣り切れなさを感じた。

（佐々木耕志）

三月六日の作業は、会員一名・社協一名で行なった。水に浸かったファイルの中の書類を、破れないように丁寧に取り出し、乾かす為ブルーシートに並べていった。また、濡れたレコードもケースから取り出し、同じように並べた。特に書類は、ファイルに鋏を入れて一枚ずつ剥がし取るという、根気の要る繊細な作業であった。二時間ほどかけて作業は終了した。

三月中旬の時点で、床の消毒や張り替えが済んだお宅はまだ少ない。家財を運び入れる為、若干名のボランティアを募集予定との事。会としても、出来るだけお手伝いさせて頂こうと思う。

（黒木淳祐）

令和元年度住職学研修「グリーフケア研修会」

令和元年八月三十日、宗務所・禅センターにおきまして住職学研修が執り行われました。翌月に控えた「祈りのつどい」への予備学習として、一般財団法人リヴオン理事・水口陽子様を講師にお招きし「グリーフケア」についてご講義を頂きました。

悲嘆を意味する「グリーフ」、本講では大切な人を喪失するという強い悲しみに焦点を置き、宗教者としてそこにどう向き合い、一助となるべきかというテーマのもと研修が進められました。

講義序盤はグリーフそのものについての解説となり、悲嘆の起こり・その種類や期間・経過プロセスにまで至る個人差のありよう、更には悲しみが心理・身体・社会性に及ぼす影響など、非常に深い所までご教授を頂きました。

続いてそのケアにお話が進むと、現状社会的に備わるサポートやカウンセリング等の役割にも触れられ、その中で宗教・僧侶に任される分野を「**弔いの力**」と題して考察する時間となりました。寺院と

して出来ること、一僧侶として役に立てる事を考え、法要や傾聴・色々な集まりなど、参加者個々が具体案を探る大きなきっかけになったように思われます。

個人的な所感になりますが、本研修中で最も衝撃だったのが、悲しみという（恐らくは人間が最も遠ざけておきたいはずの）感情に対して、これほどまで緻密な解析・究明に取り組む方々が居られるという事でした。殊に水口様におかれては、ご自身の大変な経験談までを交えても、解りやすいご講義に終始頂き、頭の下がる思いで拝聴した次第です。サポートという行為の根本が、我々が常として胸に置くべき利他の念である事を、様々な面で再認識した機会でした。

（広報部　佐藤幸悦）

第十一回「祈りのつどい」を終えて

第十一回『祈りのつどい』が令和元年九月二十八日に、湯沢市永巌寺様を会場に開催されました。開催に先立ち、寺院講義の講師に秋田グリーフケア研究会涌井真弓先生を招き、大切な方をなくされ残された家族や親族の心境などについてご講義頂きました。栗谷大三師による法話、黒木淳祐師による写仏を行い、参加者の方々は自らの気持ちと向き合いながら法話を聞き、追悼法要では導師を会長赤石基彦師が務め、梅花流詠讃歌の心地よい音色に合わせ法要が始まり、そして参加者の皆さんは、一人一人亡き大切な方々を想い、焼香し、手を合わせ参加していました。

参加者の大半は自死によって大切な方を亡くされており、開催前のミーティングでは、先輩和尚様方々より細心の注意をもって対応をするように、と指導を受けておりましたが、私はある事を言い出せずにいました。何を隠そう、私も自死被害家族の一人なのです。

自死被害家族と一言で言っても色々なケースや、個人個人の考えの違いがあります。私は父親を十年前に亡くし現在に至りますが、父の自死を恥じたり隠そうという想いはありません。しかし、その事を他の方へ伝えると、気をつかわれたり、その後の接し方が変わったりと周りを困惑させてしまう　それなら話さない方がいい　と言う結論に至り、なるべく父の自死については話さないようにしてきました。今回のグリーフケア涌井真弓先生

の講義を聞き、自死被害家族を持った方々の集いがあり、多くの方が同じ様な苦しみをもっていることを知りました。

最後に、この文章を記すにあたり、自分自身色々な葛藤がありました。僧侶としての立場、そして自死被害家族としての経験を基に、同じような苦しみや迷いをもつ方へ手を差しのべ、寄り添える環境を整えていきたいと思っております。（広報部　今野秀平）

随聞会（ずいもんえ）

～宗教者のリーダーシップ～

小春日和の中、令和元年十一月二十一日から二十二日の二日間にわたり随聞会が開催されました。講師は浄土真宗本願寺派光明寺僧侶、一般社団法人「未来の住職塾」塾長の松本紹圭師にお務めいただきました。

「未来の住職塾」とは同団体のホームページによりますと「**地域・宗派を越えて集う寺院が、これからのお寺づくりと宗教指導者としてのリーダーシップについて学び、切磋琢磨する場の提供**」を目標に活動をされているそうです。また松本師は日本のみならず、世界中で講話をされている方であります。

松本師はまず「**住職は宗教者であり経営者である**」と話され、従来の檀家制度に則った寺院運営に終始せず、次の経営方針を模索する必要性を説かれました。

しかしそれは、既存の宗教的価値観や檀家制度によって作られた「居心地の良い現状」を変えるということでもあります。そしてその為に必要な能力を、「**未来を見据えて今までの経営から脱却し、現代の、また次代の社会的価値観に適応した変革を成し遂げる力**」、つまり副題でもある「**宗教者のリーダーシップ**」とされました。

また、松本師は、人々の宗教意識が変化し、新しい価値基準の中で生きていることに触れ、我々もまた新しい宗教者としての形を模索し、人々に新たな価値観を提示する必要があるとされました。これを師は「**重要なのは『新しいこと』をするのではなく、守り受け継いだものを『新しく見せること』である**」と表現されました。

これらを踏まえた上でグループワークが始まり、まず一日目は参加者に二十五年後の未来を考えてもらい、予想される檀家数の減少による収入減・建物の老朽化に対し、どのような方針で対処するかを提案しあうことが行われました。案としては、坐禅会や写経会などで寺院を活性化させ、観光の充実によって収入を得るといったものでした。

また二日目のグループワークでは、私達が日常行う坐禅・法要・掃除など僧侶としての活動を、若者が興味をもって受け入れられるよう紹介してみるという試みが行われました。

この二日間のグループワークを通じて私が確信したのは、新しい寺院運営を考えた時に土台となるのは、今まで修行してきた曹洞宗僧侶としての経験であること、そして、現状を変えるには多大な意志が必要ではあるが、それを成す力は我々の中にすでに備わっていることであります。

最後にこれらを気付かせて下さいました松本紹圭師に、深く謝辞を述べさせていただきます。

（十四教区　蚶満寺内　横山智弘）

会員紹介

永平寺　本山事務所主事兼知庫
第四教区　清光院住職　佐藤　良浩師

早いもので永平寺に上山して三度目の春を迎えようとしています。今この二年間を振り返ってみますと、ちょうど一昨年のお彼岸前に永平寺に上山し、就任の挨拶をしたのが、つい先日の様に感じられます。

私は「**本山事務所主事兼知庫**」という配役を頂き、経理と倉庫管理を担当しております。大衆（＝修行僧）としてそれなりに長く永平寺には居たものの、いざ役寮（＝教師役・管理職）として上山した当初は仕事の内容がわからずに右往左往、一年目は言われた事を何とかこなすまで、二年目になると少し仕事にも慣れ、どうすれば効率良くこなせるものかと四苦八苦する毎日でした。

役寮の任期は三年であり、これからその最後の年度に突入する所です。再任の可能性もありますが、一つの区切りとして目標を立て、この一年をしっかりと勤めていきたいと思っております。

今、永平寺では少子化の影響もあり、修行僧の減少という問題に直面しています。従来と同じやり方では、それまで出来ていた作務が行き届かない、行持に随喜する人数が足りない等、公務分担の面で様々な課題が生じてきています。

特に私が担当する知庫寮においては、倉庫の管理が充分に成しきれないという懸案もあり、今年一年をかけ少人数でも作業が可能な状況に改善しようと模索している所です。まずは在庫物品のうち必要物と不要物を仕分け、倉庫の整理から始めようと考えています。

また数か月という短いスパンで大衆の転寮がある以上、誰が見てもすぐに把握しやすい倉庫である必要もあります。在庫管理にとって必須項目である「**整理、整頓、清潔、清掃**」を柱とし寮員の意見も取り入れつつ、この二年間の経験を基に、現在の永平寺に適した環境作りをしていくつもりです。

仕事としては表舞台に出ない勤めですが、毎日少しずつ地道に努力したいと思います。

最後に、永平寺には大衆および役寮として二度に渡ってお世話になり、この貴重な経験は私の僧侶としての礎となっています。その恩返しの意も含め、少しでもご本山の役に立ち任期満了できるよう日々精進を続けて参ります。

就任一年を振り返って

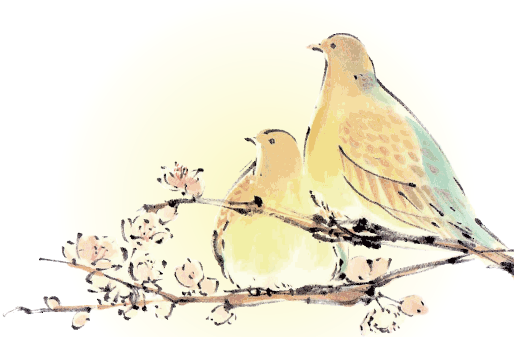
会長　赤石　基彦

例年にない暖冬となり、令和二年は早い春の訪れを予感させます。また、新型コロナウィルスの影響は世界規模であらゆる場面におよび、今は早期の終息を願う毎日です。この、人のはからいに関係なく、どの姿も真実として目の前に現成（げんじょう）しているありように、社会は日々試されているような、翻弄されているような気が致します。

就任一年目はアッという間でした。秋曹青創立四十周年を迎えた直後の新体制という気負いもあり、初めのころは焦りもありました。これまで秋曹青に関わってきた身ではありますが、会長として会を率いていくことの大変さは、また別のものであることを痛感致しました。「第二十期の、自分たちのペース」というものをつかむまで手探りの状態でしたが、今期執行部には優秀なブレーンがそろっていたことが何よりも幸いで、不甲斐ない会長の至らないところをすべて引き受けてくれました。おかげさまでこの一年、「**お寺のこれから**」というテーマと、「**シェア**」という事業運営と活動全般におけるキーワードを掲げた、今期秋曹青のオリジナリティをなんとか醸（かも）し出すことができたと思っております。

また、令和元年度は災害の多い年でもありました。「**東北はひとつ**」の想いで、自分たちが今できる支援をしっかり行うことができたのも偏（ひとえ）に皆様からのご理解とご協力のお蔭です。

第二十期秋曹青一年目を無事に終えられたことに感謝し、ここにお礼申し上げます。



曹青秋田／第88号
発行／秋田県曹洞宗青年会
事務局／羽後町新町字上高寺99　龍泉寺内　　発行責任者／赤石基彦　　編集責任者／佐々木耕志
秋曹青ホームページ　http://www.sousei-akita.net/